

AT HOME WITH SWEDEN

Stig Lindberg

Wilhelm Kåge

Karin Björquist

Lisa Larson

2026.6.27 ± 1 | 9.6日

うつつわのデンの

グスタフスベリのある暮らし

GUSTAVSBERG

ヴィルヘルム・コーゲ《「ビューロ」耐熱深皿》製作 1930-1955 年 Photo: Nationalmuseum / スティグ・リンドベリ《「ベション」》カップ&ソーサー、LL モデル》製作 1960-1974 年 Photo: Nationalmuseum / リサ・ラーソン《「大きな動物園」シリーズより ネコ》製作 1966-1992 年 Photo: Viktor Fordell/Nationalmuseum / カーリン・ビョルクヴィスト《「ルードカント」ポウル、BK モデル》製作 1968-1970 年 Photo: Nationalmuseum / すべて スウェーデン国立美術館蔵 ©Kooperativa förbundet KF.

静岡市美術館

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F info@shizubi.jp

Aoi Tower 3F, 17-1, Koyamachi, Aoi-ku, Shizuoka, 420-0852 JAPAN

tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

スウェーデンのうつわ グスタフスベリのある暮らし

スウェーデンの首都ストックホルムから東へ約 20 km離れたヴァルムドゥー市に位置する港町グスタフスベリ。この地に製陶所が設立されたのは 1825 年のことでした。デザイナーの自由な創造と産業が結びついた豊かな関係から生み出されたテーブルウェアの数々は、人々の日常に寄り添い、暮らしを彩ってきました。本展はグスタフスベリを代表する 4 人のデザイナー、ヴィルヘルム・コーゲ、スティグ・リンドベリ、リサ・ラーソン、カーリン・ビョルクヴィストに焦点をあて、スウェーデン国立美術館が所蔵する約 300 点の作品で、今なお愛されるグスタフスベリの歴史と魅力をひもとく、日本初の展覧会です。



スティグ・リンドベリ「スピーサ・リップ」/ 製作 1955-1974 年 / ボーンチャイナ、転写・転写装飾
「スプリングレ (馬)」/ 製作 1950-1970 年代 / 珐瑯器、絵付装飾
「テルマ」/ 製作 1955-1979 年 / 耐火樹脂、耐火陶器ほか
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

◆開催概要

● 開催期間: 2026年6月27日(土) - 9月6日(日) 【全63日間】

● 休館日: 毎週月曜日 *ただし7月20日(月・祝)、8月10日(月)は開館、7月21日(火)は休館

● 開館時間: 10:00 - 19:00 (展示室入場は閉館30分前まで)

● 観覧料: 一般1,600(1,400)円、大高生・70歳以上1,200(1,000)円、中学生以下無料

お得な一般前売ペアチケット2枚1組2,600円

* ()内は前売および当日に限り20名以上の団体料金 *障害者手帳、特定医療費(指定難病)受給者証、小児慢性特定疾病医療受給者証等をご持参の方および必要な付添の方1名は無料

● 前売券: 4月28日(火)から6月26日(金)まで販売

静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、セブンチケット[セブンコード:115-010]、ローソンチケット[Lコード:45303]、チケットぴあ[Pコード: 687-437]、谷島屋(パルシェ店、マークイズ静岡店、流通通り店)、MARUZEN&ジュンク堂書店新静岡店、戸田書店江尻台店

■ 一般前売ペアチケット取扱場所

静岡市美術館(窓口、オンラインチケット)、セブンチケット[セブンコード:115-036]、ローソンチケット[Lコード:46303]、チケットぴあ[Pコード:687-436] ※当日ペアチケットの販売なし

主催: 静岡市、静岡市美術館 指定管理者(公財)静岡市文化振興財団、静岡朝日テレビ

● 後援: スウェーデン大使館 特別協力: スウェーデン国立美術館

協力: 全日本空輸 企画協力: S2 制作協力: NHKプロモーション

静岡展協賛: ボルボ・カー静岡 / ボルボセレクト浜松



◆見どころ

1 「グスタフスベリ」の歴史と魅力をひもとく、 日本ではじめての展覧会！

北欧デザインや美術を紹介する展覧会が各地で開催され、北欧への関心は衰えることはありません。本展は、1825年設立のスウェーデンを代表する製陶所「グスタフスベリ」の歴史と魅力をひもとく、日本ではじめての機会となります。「すべての人に美しさを」「より美しい日用品を」という、スウェーデンデザインにとって欠かせない理念のもとに生み出されたテーブルウェアの数々は、人々の暮らしを豊かに彩ってきました。グスタフスベリの歴史をたどることは、スウェーデンの暮らしや豊かな生き方を知るだけでなく、デザインが社会においていかに大きな役割を果たしてきたかを理解することにつながるでしょう。本展は全国6会場（秋田、東京、松本、京都ほか）で開催される巡回展です。巡回第1会場となる当館では、開幕初日にグスタフスベリ陶磁美術館のキュレーターによる特別講演会を実施します。

2 リサ・ラーソンをはじめ、 グスタフスベリを支えた4人に焦点を当てる

日本でも人気の高いリサ・ラーソン（1931-2024）をはじめ、濱田庄司ら日本の民藝運動とも関わりの深いヴィルヘルム・コーゲ（1889-1960）、心躍るデザインを手がけたスティグ・リンドベリ（1916-1982）、ノーベル賞の晩餐会で使用される食器セットをデザインしたカーリン・ビョルクヴィスト（1927-2018）、グスタフスベリを代表する4人のデザイナーに焦点をあて代表作の数々を紹介します。

3 スウェーデン国立美術館の所蔵作品から 大ボリュームの約300点を紹介！

かつての工場を再利用したグスタフスベリ陶磁美術館は、グスタフスベリの歴史と名作に触れることができる美術館です。2020年にスウェーデン国立美術館の管理のもと大幅なリニューアルを果たした同館のコレクションから約300点を紹介。現在では手に入りにくい貴重なプロダクトから、デザイナーたちが自由に制作活動をする事ができた工房「G-スタジオ」で作られたユニーク・ピースと呼ばれる1点ものの作品まで、グスタフスベリの魅力が存分に伝わる作品たちが大集合します。



スティグ・リンドベリ「ベショー」シリーズ、LLモデル / 製作1960-1974年 / 陶器、転写装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

プロローグ / 1825- 陶器の町グスタフスベリ



グスタフスベリのプロモーションプレート（工場の風景）/1911年 / 磁器、転写装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

ストックホルムから東へ約 20 km離れたヴァルムドゥー市に位置する港町グスタフスベリ。この地で製陶が始まったのは 1825 年のことでした。卸売業を営んでいたヘルマン・エーマンが製陶所の設立許可を得て、2 年後に工場が稼働を始めます。経営体制はその後幾度も変化しますが、グスタフスベリにおける製陶の礎がここで築られました。西欧では 18 世紀初頭にドイツのマイセンが硬質磁器の製造に成功し、グスタフスベリも当初はドイツから職人を呼びよせていました。しかし 19 世紀に入ってもなお磁器は高級品で、限られた人だけが手にできるものだったため、グスタフスベリではより安価で、民間が主導となって発展した英国の作陶を参考に、職人を招聘し、陶土やデザイン、銅板転写や鋳型成形などの技術を導入し量産体制を整えていきます。



皿（アネモネ装飾 東洋庭園の象）/ 製作 1830 年代 / 陶器、転写装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



「ノーディスク・スティール」燭台 / 製作 1870-1880 年代 / 陶器、絵付装飾
Photo: Nationalmuseum

創業当初は国外からの影響を強く受けていたグスタフスベリですが、1870 年代頃から独自の製品作りが進められていきます。英国のアーツ・アンド・クラフツ運動や、世界を席巻していたアール・ヌーヴォー様式が、工業化・都市化が進む北欧にももたらされると、自国の歴史や文化を見直すナショナル・ロマンティズムの機運が高まります。民族的アイデンティティであるヴァイキング文化からモチーフを引用したり、スウェーデンに自生する身近な植物が描かれるなど、国際的なトレンドとスウェーデンらしさが融合する製品が作られていきます。さらに 1889 年のパリ万博をはじめ、国内外の展覧会へと出品を重ねることで、グスタフスベリは技術や独自性を磨き、ブランドとしての地位を確立していきました。

本パートでは創設時から 20 世紀初頭までのグスタフスベリ草創期を紹介し、スウェーデンにおける陶磁器の近代化の幕開けをたどります。

世界的に流行したアール・ヌーヴォー様式と
スウェーデンでクリスマスの花として親しまれている
スズラン模様が融合！



「リリエコンヴァリイ（スズラン）」皿、W モデル /
デザイン 1897 年以前 / 陶器、転写装飾、エナメル彩
Photo: Nationalmuseum

ヴィルヘルム・コーゲ／ 毎日をもっと豊かに



施釉するコーゲ／1950年代頃

1917年、スウェーデン・スライド協会の推薦により、画家・グラフィックデザイナーのヴィルヘルム・コーゲがグスタフスベリに入社します。コーゲはアーティストック・ディレクターとして、一般家庭でも使いやすいデザインのテーブルウェアを生み出し、グスタフスベリを国民的ブランドへと導いていきます。

第一次世界大戦後のスウェーデンでは、美術史家で後にスウェーデン・スライド協会の会長となるグレーゴル・パウルソンによる著作『より美しい日用品を (Vackrare vardagsvara)』(1919年)を指標に、アート・工芸・産業が一体化した質の高い工業製品の製造が図られます。こうしたデザイン改革は、女性思想家・教育者のエレン・ケイによる『すべての人に美しさを (Skönhet för alla)』(1899年)のなかで述べられた、家庭における美しさは社会全体の発展につながるという思想が下敷きとなっていました。手描き絵付の雰囲気を残した労働者のためのセット「リエブロー」、オープン調理後そのままテーブルに出せる耐熱磁器の「ビューロ」、各食器に定められていた用途を開放し、自由な使い方とスタッキングによる収納スペースの縮小が可能な「プラクティカ」シリーズなど、機能的であり、かつ工芸的な美しさが備わったコーゲのテーブルウェアは、一般家庭の生活の質を押し上げ、スウェーデンが福祉国家を形成していくなかでも象徴的な存在となりました。

本パートでは日本の民藝運動とも交流があったコーゲを通じて、大量生産と芸術性が結びついたグスタフスベリの転換期をたどります。



「リエブロー」プロモーションプレート、KGモデル / 1916-1917年 / 陶器、絵付装飾
Photo:Linn Ahlgren/Nationalmuseum



「ビューロ」耐熱深皿 / 製作 1930-1955年、転写・絵付装飾
Photo:Nationalmuseum



「ファシュタ」花器 / 約 1950年代 / 炆器、搔落し装飾
Photo:Nationalmuseum

手彩色された
1点物のユニーク・ピース



皿 / 1942年 / ファイアンス、絵付装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

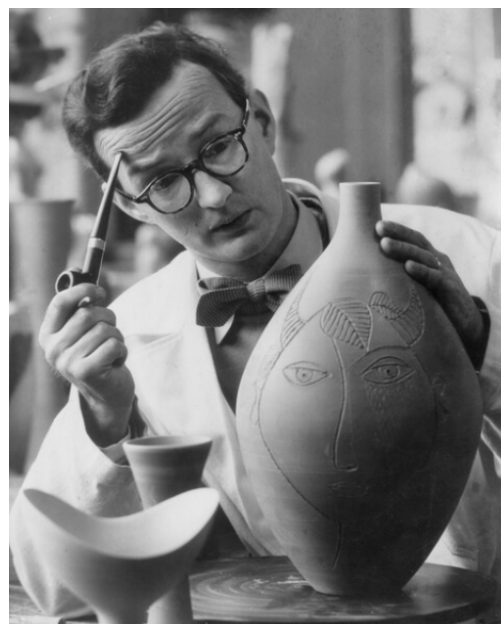
スタッキング可能な
シンプルで機能的な食器セット



「ウィークエンド」シリーズ、「プラクティカ」モデル / 1930年代 / 陶器、絵付装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

スティグ・リンドベリ / 暮らしを彩るデザイン

大衆に質の高い製品を提供するというコーゲが築いた流れを受け継ぎ、色彩豊かで遊び心溢れる作品を生み出したのが、1937 年に入社したスティグ・リンドベリでした。1942 年コーゲがグスタフスベリ内に設置した「G-スタジオ」は、生産性や効率が求められる製造ラインとは異なり、アーティストたちが自由に制作できる工房でした。1949 年にコーゲの跡を継いでアーティスティック・ディレクター (1949-1957、1972-1980) となったリンドベリは、このスタジオを発展させます。イラストレーターとしても活躍したリンドベリのファイアンス製の絵皿や花器は、時に熟練した絵付師のもとで量産され、一般家庭でも手に入れやすいアート作品として食卓や室内を彩りました。リサ・ラーソンやカーリン・ビョルクヴィストらも輩出した G-スタジオの自由な創造性は、グスタフスベリのものづくりの基盤となり、工場での大量生産と両輪となって機能しました。



G-スタジオで制作するリンドベリ / 1960年代

グスタフスベリを代表する
「ベシヨー」シリーズもたっぷり！

ベシヨーは庭に設けられた
日本の東屋のような空間。
スウェーデンの人々は
そこでFIKA（フィーカ）と
呼ばれるお茶や団らんを
愉しみます。



「トヴェットストレッケット（洗濯物干し）」皿 / 1942年 /
ファイアンス、絵付装飾

Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

「ベシヨー」蓋付ボウル / 約 1960 年以前 / 陶器、転写装飾、木
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



クリスマスコレクションプレート（1982、ルシーアの行列と共に）
/ 1982年 / 浮彫・絵付装飾 Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

毎年 12 月 13 日に行われる
スウェーデンの伝統行事ルシーア祭。
蠟燭の冠をつけた聖人ルシーアに扮した
子どもたちが行進します。
黄金色のサフランパンも欠かせません。

リンドベリがアーティスティック・ディレクターとして活躍した所謂ミッドセンチュリーと呼ばれる時期は、北欧デザインの黄金期にあたります。1955 年には建築から家具、日用品まで住空間全体がテーマとなったヘルシンボリ博覧会（通称 H55）がスウェーデンで開催され、北欧デザインが世界的な注目を集めました。そこで発表されたリンドベリのオープンで使える磁器の「テルマ」や、必要な客数だけ購入できる「スピーサーリップ」は、テーブルマナーにとらわれない、気取らない食卓という新しい生活様式をもたらしました。さらにリンドベリは規格化したプレートやカップなどの素地を使って生産効率を高め、その上に多彩なデザインパターンを施しています。グスタフスベリの代名詞である葉っぱ模様の「ベシヨー」は、東屋のような緑で囲まれた庭の休憩所を意味する言葉ですが、単なる葉モチーフを超え、家族や友人らとフィーカ（お茶時間）を愉しむスウェーデン人の暮らしそのものの表象といえます。

本パートでは、スウェーデンにおけるモダンデザインの象徴であり、グスタフスベリの黄金期を支えたリンドベリの、心躍る作品の数々を紹介します。

リサ・ラーソン / 喜びとともに



リサと猫たち / 1950年代
Photo: Arkivet / Nationalmuseum

リンドベリの招きにより、1954年にG-スタジオの実習生としてグスタフスベリへ入ったリサ・ラーソンは、機能的でシンプルさを重んじるモダニズム全盛の北欧デザインに、温かみとユーモアをもたらします。産業デザインには関心が薄く、作家志望のラーソンを尊重し、アトリエや専属のろくろ師がつくなど、制作に専念する環境が整えられました。

リンドベリの勧めでシリーズ化された動物フィギュリンは、鋳型で成形した素地に手作業で彩色が施されています。フィギュリンはリサ以前のアーティストたちも制作していましたが、効率的に複数点製作しながらも、ひとつひとつ異なる表情が魅力的な動物たちは大ヒットし、グスタフスベリに大きな利益をもたらしました。ラーソンはこうした多くの人に受け入れられる作品を制作する一方、粘土や釉薬の表情を活かした、素朴な表情の花器や、内面世界を表出させた作家性の強い彫像作品まで幅広い表現を展開しています。

本パートでは、グスタフスベリ在籍中に手がけたテーブルウェア、日本でも人気の高いネコやライオンのフィギュリンたち、レリーフや彫像作品などの1点ものの作品まで、多彩な魅力にあふれるラーソンを紹介します。



「ストーラ・ソー（大きな動物園）」シリーズよりネコ /
製作 1966-1992年 / 妬器
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



「アフリカ」シリーズより ジャイアント・ライオン / デザイン
1964年 / 製作 1964-1988年 / 施釉妬器、絵付装飾
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



「ラーソンス・ウンガル（ラーソンの子どもたち）」シリーズより ベッレ / 製作 1964-1980年 / 妬器



「サムヘルスデバッテン（社会討論）」 /
製作 1969-1971年 / 妬器、絵付・多色転写装飾
Photo: Nationalmuseum



「マティルダ」シリーズ / デザイン 1960年代 / 製作 1962-1972年 /
陶器、絵付装飾
Photo: Btil Wreting / Nationalmuseum



花器 / 1950-1960年代 /
妬器、ろくろ成形、エッチング装飾
Photo: Nationalmuseum

カーリン・ビョルクヴィスト／ 日常に息づく美しさ

カーリン・ビョルクヴィストは 1950 年、コンストファック学校（現・スウェーデン国立美術工芸大学）の陶芸課程卒業後にグスタフスベリに入社しました。1956 年の初個展で発表した器は、手びねりによる素朴な風合いと深みのある釉薬が評価され、後に量産ラインとして販売されます。手仕事の風合いを機械生産に落とし込み、かつ低価格を実現させたこのシリーズの名が「ヴァールダーグ（日常）」とあるように、ビョルクヴィストの作品は私たちの日常生活にひっそりと寄り添っています。1970 年にデザインされた、食洗機対応でスタッキング可能なコーヒーカップは、レストラン、食堂、公共施設などあらゆる場所で現在も使用され、スウェーデンの日常風景の一部となっています。

アーティスティック・ディレクター（1981-1986）も務めたビョルクヴィストですが、作家性よりも工業デザイナーというべき姿勢を貫いたため、作品は匿名性の高いものがほとんどです。しかし 1991 年にノーベル賞の晩餐会のためにデザインした豪華なディナーセット「ノーベル・サービス」は、国民の誰もが知る彼女の代表作です。ノーベル財団の 90 周年記念として企画され、現在も毎年 12 月 10 日にストックホルム市庁舎で行われる晩餐会に登場するこのシリーズは、一般販売もされていたため、ノーベル受賞者だけでなく誰もが手にすることができました（現在は生産終了）。全ての人により良いものを届けるという、民主主義的であり平等思想に基づくグスタフスベリの精神が、こうしたところにも表れています。

本パートでは、日本を訪れ、日本文化からも影響を受けたビョルクヴィストの作品を通じて、日常に息づくグスタフスベリの姿を探ります。



ろくろをまわすビョルクヴィスト／1950年代
Photo: Arkivet / Nationalmuseum



製造ロールストランド・グスタフスベリ /
「ノーベル・サービス」（参考写真） / 製作 1991 年 / ボーンチャイナ、金彩
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

コーヒーカップ&ソーサー、BL モデル（一部出品）
/ 製作 1974 年以降 / ボーンチャイナ
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum



花器 / 1950 年代 / 妬器
ボウル / 製作 1950 年代 / 妬器、浮彫装飾
蓋付ポット / 約 1950 年代 / 妬器
球体 / デザイン 1950-1960 年代 /
妬器、手ろくろ成形、施釉
Photo: Viktor Fordell / Nationalmuseum

エピローグ／ 受け継がれるスピリッツ

展覧会の最後は、コーゲ、リンドベリ、ラーソン、ビョルクヴィストが手がけたプレート 20 枚が並ぶウォール・プレートによって締めくくられます。それぞれのアーティストが築いた個性豊かな表現や革新性、そしてすべての人に美しいものを届けることを目指したグスタフスベリの精神を振り返ることができるでしょう。

食卓を彩るテーブルウェアに留まらず、トイレや洗面器などの衛生陶器も製造し、まさにスウェーデンの暮らしに欠かせない存在であったグスタフスベリは、2025 年に創業から 200 年が経ちました。現在では技術を受け継いだ職人たちによって、一部の復刻版がグスタフスベリの町で作られています。日本でも人気が高い、北欧を代表するブランド／メーカーはいくつも存在しますが、経営の生き残りをかけて吸収合併を繰り返し、工場の拠点を国外へと切り替えたところもあります。そのなかで製陶所の歴史を受け継いでいるグスタフスベリは、北欧のなかでも貴重な場所と言えるでしょう。かつての工場を再利用したグスタフスベリ陶磁美術館は、グスタフスベリの歴史と名作に触れることができる施設で、2020 年にスウェーデン国立美術館の管理のもと大幅なリニューアルを果たしました。現在使われていないその他のスペースはアーティスト・イン・レジデンス施設として活用され、陶磁器に限らず様々なアーティストたちが制作を行っています。かつての生産量に比べると規模は縮小しましたが、現在もグスタフスベリの町全体がものづくりの歴史と精神を受け継いでいます。



グスタフスベリの現在の製造ライン

スウェーデン国立美術館／グスタフスベリ陶磁美術館



スウェーデン国立美術館、ストックホルム



グスタフスベリ陶磁美術館、グスタフスベリ

スウェーデン国立美術館は、1866 年ストックホルムに開館しました。王室が築き上げたコレクションが基礎となり、1500 年から 1900 年までの絵画、彫刻、素描、版画、および中世初期から現在までの工芸、デザイン、肖像画で構成されています。ヨーロッパの画家たちによる傑作に加え、カール・ラーションやアンデシュ・ゾーンといったスウェーデンの芸術家による重要な作品が含まれています。

2000 年、グスタフスベリの所有者だったスウェーデン消費者協同組合連合（KF）は、膨大なグスタフスベリ・コレクションを国に寄贈しました。それ以降、同コレクションは国立美術館の管理下にあり、グスタフスベリ陶磁美術館で展示されています。コレクションには、陶芸作品から衛生陶器、プラスチック製品までの、1825 年の創業から 1993 年までに製作された 4 万 5000 点、さらに石膏型や道具類、製陶所の資料や参考図書までが含まれています。

◆関連イベント

①記念講演会「グスタフスベリーアーティストと産業」

日時：6月27日（土）14：00～16：00（開場13：30）

講師：ウルリーカ・シェーデル氏

（スウェーデン国立美術館／グスタフスベリ陶磁美術館キュレーター）

※英語による講演（逐次通訳が付きます）

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名〔応募多数の場合は抽選〕

申込締切：6月11日（木）必着

②講演会「『美しい住まい』をつくる

ーミッドセンチュリーのスウェーデン社会と生活デザイン」

日時：7月18日（土）14：00～15：30（開場13：30）

講師：太田美幸氏（一橋大学大学院社会学研究科教授）

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名〔応募多数の場合は抽選〕

申込締切：7月2日（木）必着

③しずびオープンアトリエ

日時：8月7日（金）～8月16日（日）

①13：30～14：30 ②15：00～16：00

会場：当館ワークショップ室

参加料：300円

※先着順。受付でチケットご購入のうえ、ワークショップ室へ

※チケットは当日12：00より販売

対象・定員：小学生以上、各回10名

④当館学芸員によるスライドトーク

日時：8月22日（土）14：00～（40分程度）

会場：当館多目的室 参加料：無料

※申込不要、先着順。当日会場へお越しください。

7月限定！

15時からの「フィーカ」タイム特典！

スウェーデンには1日2回、「フィーカ（FIKA）」と呼ばれるお茶や団らんを愉しむ文化的習慣があります。

7月の15時以降にご観覧の方、各日先着50名様に、本展オリジナルシールをプレゼント！

※本展をご観覧の方に限ります（1名につき1枚）。

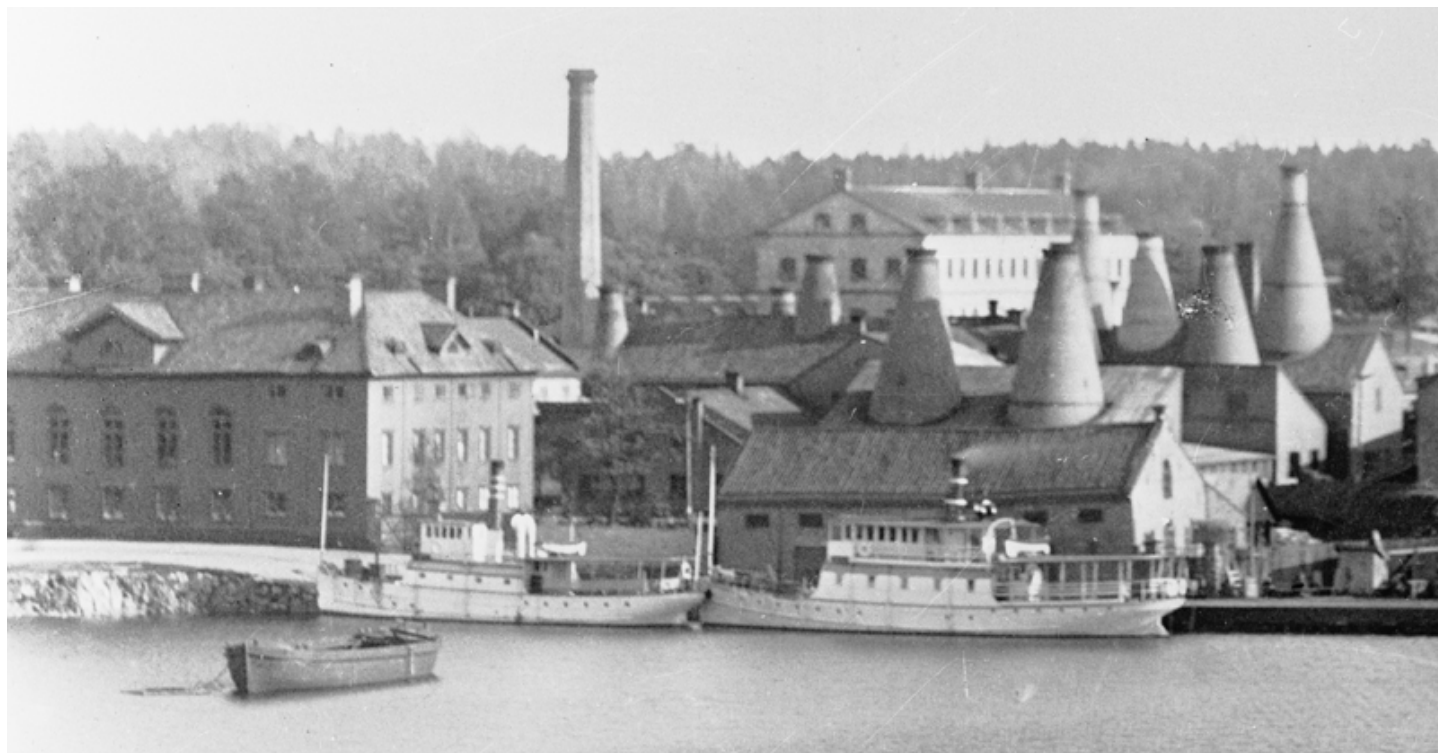


Photo: Repro / Sjöhistoriska museet



- 《電車》 JR静岡駅北口より地下道を利用して徒歩3分
静岡鉄道静岡駅より徒歩5分
- 《新幹線》 東京駅・名古屋駅から東海道新幹線ひかり号で約1時間
新大阪駅から東海道新幹線ひかり号で約2時間
- 《車》 東名静岡ICより約15分
※お車でのお越しの際は、近隣の駐車場をご利用ください。
- 《空路》 富士山静岡空港より静鉄バス
（静岡エアポートライナー）で約1時間

〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F
tel. 054-273-1515（代表） www.shizubi.jp